

年のとき母を亡くし、二十年三月一家の支柱として働いていた兄が召集され、次いで団の七割近くが召集を受け労働力は激減した。

昭和二十年八月、青年学校生徒に団長から集合がかりソ連参戦を知った。二人一組となり、各部落に鶏寧県庁まで避難する命令書をもって走った。各部落とも、あまりな急報に大騒ぎとなった。

ソ連機の空襲で鶏寧集結は危険との情報に、林口を目指すより道がない。団は先頭集団、中央集団、後尾集団と三集団に分かれて行動した。中央集団は貝沼団長以下四百余人、当時十八歳前後の、吉岡氏ら青年訓練生数人は団長の目となり耳となつて伝令や斥候となつて活躍した。退却してくる関東軍の兵隊からの情報では、前方からは中国反乱軍、後方の国境からはソ連の戦車隊が迫つて来るという。婦女子連れの開拓団の行動は不可能であることを判断した貝沼団長は、その時既に死を覚悟したのではなからうか！

生きて引揚げたものの、一家全滅のごとき佐賀の故郷は、感慨無量であつたに違いない。

その頃、国の方針として北海道開拓をすすめていたので、佐賀県から七人とともに、北海道勇払に入植。広漠たる満州に似ているので、心機一転開拓にいそんでいた。

その後、納富家の家族から迎えられ、吉岡から納富善蔵となる。その時、二十八歳だった。

営農は現に機械化農業であるし、善蔵氏は地方の企業家から囑望され、現に建設会社の総務部長の重職に就任し、誠意をもつて勤務する態度は会社からだけでなく、社会からも広く信望をあつめている。

(引揚者団体北海道連合会)

副会長 池田 幸次郎)

赤い夕陽

北海道 富樫 昭 治

襲撃を受けて

その朝(昭和二十年八月十二日)私たちの第十次揚

栄庄内開拓団を避難してきた一行が、県庁のある宝清街から二十八キロくらいの地点、双龍河義勇隊開拓団跡の無人になった家屋に一泊、宝清街に向かって出発しようとしている時であった。

私の父と親しくしておった満州人の張さんが、荷物を運ぶ手伝いの五頭立の大車ダイシャでやって来て、父を呼び出し耳うちしてくれたことは、こうだった。

「今日この部落を出たら間もなく、あなた方を襲うべく警察隊が待ち構えている。こんなことを日本人に密告したことが知れたら私はやられるかも知れないが、富樫さんを見殺しにすることは出来ない。どうか今日の出発は見合わせてくれないか」と、言うのであった。父は直ちにその情報にもとづいて、主だった団員を集めて協議した。

だが、しよせんこの部落にとどまっておつても受けるかも知れない襲撃であれば、逃げ場のない袋の鼠となつて、かえつて犠牲者を多くする心配。もう避難命令が出て四日目。一時も早く日本軍のおる治安の保たれているところへ急がなければならぬ。ここで一日

を費やすことは出来ない、その結論で覚悟を決めて出発することになった。

襲撃に供えて持ち合わせの小銃には、婦女子は一発ずつの実弾をこめて安全装置をして、小さな子供を背負いその銃を肩に。現地召集で残り少なくなった男の人たちは、すべて百発ずつの弾帯を肩に銃には弾倉一ぱいの五発の弾をこめ、特に先頭と後尾の警護を厳重に、三十台ばかりの最少限必要な物と食糧、弾薬を積んだ馬車を中心に出発した。父と数人の青年は乗馬で、先頭と後尾の連絡を密にすべく隊列の中に散らばつた。やがて部落のある丘を下りかかったところで、上に向かってくる武装した三十人余りの一隊が見えてきた。私は最後尾の張さんの大車に小学校二年の弟、満州男を乗せてもらい荷物も積んでもらつて一緒に歩いてきた。

いち早くその一隊を見つけた先頭の乗馬の青年が情報をもつて連絡にやってきた。

「楊栄開拓団の避難が余りおそいので、日本軍の命令で護衛に来た。団長に伝えてくれ」と言うのである。

しかしどうも怪しい。どんどんその一隊は登って行く。父とその隊長が話し合っている間にも。

「……………」そして最後の張さんの大車を「帰れ、帰れ」と隊列から引き離してもどさせようとしているのだ。その様子を見ていたみんなは、これは明らかに張さんが伝えてくれた情報どおり、これから襲撃が始まるのであることを感じたのであった。

父と隊長はまだ話をしているが、その隊員はすでに丘の上の方に散らばっていた。

私は母に言われて弟を、引き返す張さんの大車から連れもどすために後へ走りかかっていたが、「満州男が来たぞー」という母の声ですぐもどろうとした時、さっきまで父と話していた隊長が小走りに丘の方へ、そして拳銃を一発、「ドカーン」それが合図であった。

バラバラバラ、バラバラバラ。雨のような銃弾の耳をつんざく音、すでに撃ち合いを予想して皆、麓へ、麓の方へと走って逃げたが、弾はどこへとんでくるか分からない。

私は、父母と完全にはぐれてしまっていた。無意識

のうちに道路の側溝へとびおりましたが、そこは人でいっぱいで、お互い走っては逃げられない混乱が起っていた。

弾の音におののいた馬車が走る。その馬車が道幅をあふれて人だまりに落ちてくる。馬は倒れる、人は次々と踏みつぶされる。人も馬も弾にあたって倒れる。泣き叫ぶ地獄の悲鳴だけ、次の瞬間、私は道路を横切って反対側の側溝へと移ったが、そこはそれ以上の混乱で人も馬も入り乱れて倒れ、うめき声がおこる、そぼ降る昨日からの雨に、山肌から流れる水が泥と、ハッとするような真赤な血で染って流れていた。

数百メートルも走っただろうか。……いや実際は数十メートルも走らなかつたに違いないが、そこには私と同じ部落の仲の良かった若いお嫁さんたちが、抱いたり背負ったりした幼児と共に、死んだ仲間の上に折り重なって三、四人も、もう足を撃たれて逃げられないからと銃弾の標的になるのを待っていた。

私はそんなことはいやだった。無性に生きたい！逃げなければと走っていた。

倒れている人がだれなのか、それを確かめる気持ち

の余裕はない。耳のそばを「ビューン」と、とんでゆく弾丸の音、天上高くうなる弾、山裾の川を胸まで水に浸りながら渡ってゆくその水面に、まるで焼き火箸を突っ込むような不気味な音をさせて弾が散ってくる。人が倒れる、持ち物が流れてゆく、人、人、人で埋まった川面を鮮血が染めてゆく。

ようやくの思いで対岸にはいあがり、寒くて着込んでいた外套の、たつぷりと水を吸いこんで重くなったものを、走りながら脱ぎ捨てる。そして人の流れに従って走り続けた。

随分長い時間走ったように思うが、山の中腹に着いて一休みした時、周囲には五十人くらいの人しかおらなかつた。あとの三百人ほどの人たちはどうしたのだろうか、父も母も、そして弟の姿もその中には見えなかつたが、まださみしいと思う感情は湧いてこなかつた。

お互いに無言で冷え切った体を寄せ合い、おびえたように目だけを大きくひらき、負傷した人の手当てをする。薬がある訳でない、着ている物を裂いてしぼる

だけ、火を焚きたいのだが周囲に敵を控えた今それは出来ない。

着のみのまま、食べる物もなく、夜になって行動することにして休む。

あの襲撃でどれだけの人が傷ついたのか、翌日、三方面に分かれて逃げた人たちが偶然に一緒になり、分かつたことは、三百五十人くらいの団員家族のうち、二百七十人くらいしか集まらない。残り八十人ほどの人が足りなくなっていた。

その人たちはあの場所で殺されてしまったのだろうか、現在瀕死の重傷が四人、私の母もその一人だつたが軽傷者も含めて実に七十人ほどの人が襲撃で傷を負っていた。

五人家族だつた我が家では、弟の満州男は不明、母は両腕が撃ち砕かれて出血多量、父は左足に貫通も含めて三発、右手首に一発の合わせて四発の銃弾を受けながら指揮者としての責任に耐えていた。無傷だつたのは私と、その年一月に産まれたばかりの弟忠夫だけ。

宝清の日本軍に伝令として連絡に走つた者二人ずつ、

三回、その内の一人ももどっては来ていない。日本軍はもうすでに撤退、日本人も宝清の街にはいないらしい。

国境の虎林県から避難して来たという一人の開拓団の青年が、私たちの一行にまぎれこんで来た。

その青年の話によると、今朝、宝清街東門外まで到着し、食糧補給のため入城を希望したが、満軍の警備が厳重で拒否され、義勇隊二個中隊を中心に数個の開拓団家族一行千数百人は撃ち合いとなり、東門外で数百人が殺され、勃利方面へ逃げたらしい。疲れて寝こんでいる間に一人取り残されてしまったという。宝清の街にはもう日本人がおらず、はいられる状態ではないことが分かった。

しかし重傷組はおくれがち、先頭組がもう宝清の街に着くころになって一斉射撃の音がその方向から聞こえてきた。不安はつのるばかりで小休止の時、ここまですぐ近くに背負われて来た私の母は、出血多量で果ててしまう。

すぐ近くの川から缶詰の空缶に水を汲み母への最期

の水を口元にそそいだ時、思いがけなく母は眼をばいひひろげて、のぞきこむ我が夫、我が子を確かめながら、激しい痙攣を繰り返して死んでいった。あふれさせ、苦しい形相になって死んでいった。

父が求めてやってきた大陸の土へ、母の残り少なくなった血がしみみていく、その上に私は声を押さえて涙を重ねていた。

唇を噛みしめている父の張り裂けそうな胸に去来するものは何だったろうか、幸せにしたくて連れてきた開拓団家族の昨日に変わる受難と相次ぐ犠牲、残った人たちを連れて広野にのたれ死にしか選べなくなってしまう、満州気違いだっただ自分の無力感。神様に助けを祈るしかなかった。

「さあ、団長さんの奥さんのそばで、お前も一緒に連れて行ってもらえ」十一歳の大久保少年は、お尻からへそに抜ける重傷だったが、ここまで来て母親は、もうこれ以上みんなに迷惑はかけられないと、ノロ（鹿の一種）撃ち名人の渡部さんに頼み、私の母のそばに寝かせて「ズドン」

その銃声を聞きつけて、三人の一行が手を振りながら駆けつけて来た。

「団長さんここにおりましたか、あなた方を迎えに来たのです」それは宝清県の県立病院で副院長をしている朝鮮人の李さんと、あとの二人は同じ団の銃を持った若者で、聞けば先頭の一団が北門外に到着した時、日本語の話せる彼が応対に出て、「武装解除さえしてくれば街への入城を許可する」という警備当局の意向を伝えたのだが、あやしまれた上「反対にこの銃を持つ二人に連れられて、返答を団長に伺うべく探しに来たのだという。

明日十四日はソ連軍も宝清に入城する予定とか、早速ソ連軍の捕虜になる屈辱もあるが、生き恥をかいでもあの弾の中を逃げてきたこの人たちを死なせてはならない。多くの人びとの生死の運命を自らの責任とすれば…………。

父は従うことにして、先頭の団員家族が持っている宝清の街へと軍刀を杖にして、残っている二十数人の人と歩き出した。

突然、高粱畑から銃声が、副院長の李に要請されて銃一丁を渡したが、その姿が見えない。朝鮮人は信じ難い。その朝鮮人を信じて行動したことが悔やまれた。だが渡した銃には三発の弾しか残っていないことを知っていた。明らかに団長である自分が狙われていることが分かる。みんなに離れて歩くように言いつけて、ゆっくり覚悟を決めて歩く。二発目だれにも当たらなかった。そんなに簡単に当たるものではない。すでに身に四弾も受けている。今更死ぬことに恐れを感じてはいない。時間をおいて三発目、頭上をかすめるとんていった。

父は、杖にしていた軍刀をわたちの水たまりに静かに沈めた。自分の軍刀の一振りが相手を挑発して多くの犠牲をしいることを恐れて。

宝清街北門から五百メートルほどの地点にある麦畑を押し倒して先の一団が待っていた。

朝鮮人李との話がほごになった今、父は改めてみんなと相談して、これからどうするかについて決断を急がなければならない。

昨日の襲撃以来、野山を歩いて四十キロ余り食べ物も畑の未熟な玉蜀黍は芯まで、西瓜畑では皮ごと噛り飢えをしのいで逃げてきたのだが、もうみんなは疲れ切つて、生きる望みも失せていた。議論は沸騰したが、この期におよんで深く自決して異民族への語り草としたい。祖国へ逃れて後日、「第十次楊栄庄内開拓団、昭和二十年八月十三日午後、宝清県城北門外に於いて全員自決する」の報を伝える若者三人が選出された。

弾丸も残り少なくなっている。小銃弾は七人を貫くという事で、一列に七人ずつ並ぶことになり、^{わたち}轍からすくつた泥水を末期の水としてお互いにくみかわし、思いおもいに来世に幸福を願ひ、今生の悲運に泣いている。夢と希望を託して来た満州に自らの手でその生命を断たねばならなかったとは、余りにも悲惨な現実であるといわなければなるまい。

皆の総意の結果であるとはいいながら、二百七十人余りの命をどうすることも出来ないまま責任者としてその自決を承認しなければならなくなった父の心境は……。

やがて大人は大人、子供は子供に分けられて七人ずつ自決の列にならんだ。遥かなる祖国へ向つて黙とうを捧げて。

収容所生活

おそらくあと数分、時間の経過があの時早まっていたとすれば、私は今この記録を書いていることが出来なかつたはずだった。

今まさに、全員自決の弾丸が皆の胸を貫こうとしていた時、街の北門を出て、私たちの集団に近づいてくる腕章をつけた一行があつた。銃をかまえていた青年がいち早く見つけて殺気だつたまま、「どうせ死ぬんだ、奴らも道連れに殺つてしまふか。」と銃をその一行に向けてかまへ直した。

す早くそれを見た父が、「撃つな。撃つたら駄目だ、待て。」と、その青年から銃をもぎとつた。生か死か息づまる瞬間だった。

近づいて来たその人たちの腕章には、白地に墨で「宝清県治安委員会」と書かれており、その中の一人、協和服を着た紀さんという四十歳前後の人が、鮮やか

な日本語で、私たちを武装解除して街へ收容すべく、その説得に來た旨を伝えた。

そして、われわれが全員自決をしようとしていたことを察知して、

「なぜ日本人はこうまで死に急ぎするのだろうか、中国の農民には土を喰ってでも生きようとする執念がある。少しは見習ってもらいたいものだ。あなた方の気持ちは理解に苦しむ」と、小首をかしげ、

「今朝も早く宝清街東門で、六百人以上もの日本人が撃ち合って殺されたんだが、これなども全く死ななくてもよかったものを、残念でならない」と、本当に残念そうに話してくれたものだった。

それは私たちの一団に紛れこんできた虎林県の開拓団の青年からも聞いていたことであつたが、その日、八月十三日未明、虎林県の開拓団と饒河の義勇隊などの大集団が、国境から安全地帯と思われた宝清街を目標して避難してきたが、すでに宝清街には日本人は一人もおらず、街の東門を警備していた満軍の隊長から、「日本人の入城は許可できないから、この街を避けて

迂回するよう」勸告されたにもかかわらず、青年義勇隊を中心とする若手の強硬派が、「何をいうか、われわれは実力で絶対入城するんだ」「それでは城内から撃たなければならない」「よし、そうなれば撃ち破っても入城して見せる」

と、運んで來た重機関銃、軽機関銃を最前線に据えて撃ち合うこと二時間ばかり、城内から火を吐く機関銃は絶好の標的となつて、射手は倒れ、交替する弾薬手、運搬手も次々と撃たれて敗退し、ついには四散した。

屍累累と重なる冷たくなつた母親の胸を泣きじゃくりながらオッパイを探している幼児の血まみれの姿など、涙をさそう無惨な地獄図が現出したのだと語られた。

こうした情勢の中で、その日のうち「宝清県治安委員会」が、満軍、警察に行政、街の有識者を加えて設立され、負傷者の收容、死者の埋葬などをする一方、北門外にわれわれの開拓団避難民が到着していることを知り、武装解除をして收容すべく、收容所を設営し

て迎えに来たのだという。

紀さんは日本に留学し京都の大学で学んだ親日家で、「どうか私を信頼して、この場合は私にまかせて武装を解いて従ってくれないか。一つしかない命をどうか大切にして下さい。たとえばソ連軍の入城によって捕虜となったとしても、あなた方は開拓者であって非戦闘員だから、決して殺されるようなことにはならないのだから……」

だが、そんな紀さんの説得にも半信半疑の若者がおったり、先に私の母の傍で殺されていった大久保少年の母親や姉は頑強に拒んで、

「どうせこんなことになってしまつて、いっそ死んだ方がゆっくりするから、私たちだけはここで殺してもらおう。どうか頼みます」

「さっきと同じにだまされて、武装解除させられて殺されるんだから、今この場で死んだ方がましだ」と、収容されることに反対するものも少なくなかった。

しかし私の父は、自分の全責任でこの大勢に同胞の生命を絶つという、全員自決の瀬戸際に立たされて、

無念に胸を裂く思いであったから、その時の紀さんの出現はまさに救いの神の使者のように思われた。

しかも日本に留学したという彼の、

「生命を大切にしない」と言ってくれた言葉は、この生と死の境にあって、何という救いであったことか。

その上、紀さんの着ていた協和服は、父自身着用していた、日、満、蒙、鮮の五族協和を旗印とする満州協和会の制服で、その理想は父の夢でもあったのだ。それだけに紀さんの人柄に対して信ずるに十分なものを感じとっていた。

この人を信じる。この絶対の流れをのり越えるには、紀さんを信じる以外に道はない。

勝ち目のない敗残の身ともいふべき立場で何が出来よう、この人々を生かすためにはもう惑うてはいられない。

父は救いの神である紀さんの手をとって「どうか助けて下さい。よろしく願います」と、それだけ言って絶句した。涙がとめどなく流れる。心の中で、

「よかった、よかった」と繰り返しながら大きくうなずいていた。

こうして、私たちはその場で武装を解き、紀さんの案内で何の抵抗もなく、北門に近い街の中の「宝隆園」という昨日までの馬車宿に收容されたのだった。

夕食は真白い米飯で、塩汁の中に沈んでいる新芋は、日ごろあまり好物ではなかったが、飢えて二日も山野をさまつた後であったから、かつて味わい知ることのなかった美味となって胃の中にとろけてゆくのだった。

收容所生活は次第に食糧事情が悪くなっていく。当初「治安委員会」の責任で開設されたものが、進駐して来たソ連軍の管理下におかれるようになったのか、ソ連兵の出入りが多くなり、夜になると巡察に来たソ連兵により婦女子への暴行の連日となった。

十七歳以上の男子は集められて、引き裂かれるようにシベリアへ送られる。父も重傷だった傷のまま連れて行かれてしまう。「昭治必ず日本に帰るんだぞ」という言葉を残して。十二歳だった私には、その年一月に産まれた乳飲み子の弟忠夫が残され、もらい乳をし

ながら両親の形見となった弟を祖国日本へ連れて帰る責任が負わされたのだったが、その一念も空しく、九月二十日には野末に送らなければならなかった。

母親がおっても幼児は栄養不良で次々に死んでおり、忠夫はそんな四番目、死ぬために産まれて来たような命だったが、両親や弟を失った私にとつて、肉親としての血の絆の哀しさを教えてくれたものだった。私は天涯の孤児となってしまふ。

中国人の家へ

十月一ばいで收容所は解散。祖国へ帰られる見とおしのないまま一般中国人の家へ世話になることになったのだが、そんな知らせで日本人の子供が欲しい。嫁さんに欲しい子供連れでもよいからと、そんな中国人が收容所にごった返す。飯炊きにと雇われていったが中国人の妻にされるところだったと、もどってくる女の人がいる。仕事の手伝いにと出ていったがやはり嫁にするつもりだったと泣きながら、收容所に逃げ帰って、自炊をするものが出たり、あきらめて中国人と結婚する覚悟の人は数少ないものだった。冬を前にそれ

でも日本に帰れるまでと約束で街や近くの農村に大方の人は散らばっていった。

私のことは、宝清街にあった開拓団弁事所の大家だった王さんが迎えにきてくれた。

新しい事業をするために男の働き手も三人ほど欲しいということ、開拓団の学校の先生だった大久保先生と、虎頭から来た義勇隊の坂本さん、徳田さん、共に銃撃戦で負傷、入院、シベリア送りを免れた人たちだった。

王家の家族は両親と妹二人、兄の一家が八人、加えて王さん夫婦に子供二人の大家族制。開拓団で借りていた弁事所の建物がそっくり日本人の私たちが住む場所となり、衣服から布団も用意してくれた。

大人は二キロほど離れた西門外の、日本軍部隊跡の軍用馬房、一棟八十頭がはいる長い建物の取り壊し作業。私は王さんの妹、二十歳と十八歳の姉さんたちと遊ぶ毎日。私の父と親しかったこともあり、日本に出来ないければ王家の弟になりなさいと、何不自由のない生活で孤児になった私をかわいがってくれた。

王家での生活は二か月ばかり、大人たちのいさかいがあり、出てしまう。

王家の姉さんたちは子供の私を心配してくれて、出ていけないようにと説得するのだったが、大久保先生たちと一緒に正月を目前にした寒空を宝清の街をあとに六十キロ離れた張油房へと向かう。

張油房の親方は、開拓団が避難する時に五頭立ての大車で手伝いに来てくれて、襲撃のあることを密告してくれた張さんで、朝鮮と境の安東からこの地に開拓に来た張一族の村の親分でもある。

大家族四十人ほどに使用人が十人、ここも満州民族の大家族制、三男ながら頭領として采配を振り、建物の回りは土を堀りあげ土塀をめぐらし、銃眼を構えて自衛をしてこの地を開拓したもの、今はその一族に加えて五十戸ばかりの集落を更に大きく土を盛りあげ土塀を回して、満州国以前日本人がこの地に来て治安が確保されるまで、毎年繰り返された秋の収穫後の略奪に備えたものだった。

大久保先生や徳田、坂本さんの三人は張家の搾油

工場で働くことになり、私は同じ村の隅に、同郷安東出身で近郷の実力者である張^{ジャン}さんを頼^{たの}りて移り住んでいる宮^{ミヤ}さんの家へ。

宮^{ミヤ}さんは開拓団当時、日本人だけの私たちの部落に住み、団長として本部勤めのある父に代わって、我が家の農作業を手伝^てっていてくれた人で、父と同年輩ながら妻を失い、男の子ばかり三人を抱えて苦勞しておったのを見て、大方の反対を押しきって、土塀を回した日本人だけの部落に住まわせて手伝^てってもらったもので、日本人の避難した即日、張^{ジャン}親分を頼^{たの}りて家族もろ共この村に移^{うつ}ってきておった。

宝清^{ホウセイ}の王家に世話になっていた時も一度私を訪ねて来てくれと、両親のいなくなった今、日本に帰られる日まで、私を面倒見ることは当然のことだからと、わざわざ迎えに来てくれたのだったが、その時は宝清の街を離れたくなかった事情があり断^つったのだが、王家を出てこの寒空にいく宛もなく宮^{ミヤ}さんを頼^{たの}りて来たのだった。

日本人の子供をかま^{かま}まっている。そんな日本人の子

供を見たいと、冷たい目で周田は見にやってくる。その度に宮^{ミヤ}さんは私の両親から受けた恩義をきかせて、その両親のいなくなった子供を預^{たくわ}んすることの道理をきかせるのだが、同情をしてくれる人、又、あからさまに日本人に対する不快感で、唾を吐く人もおった。

宮^{ミヤ}さんに迷惑をかけてはいけない。大体同じ年の下である宮^{ミヤ}さんの子供たちも常に私をかばってくれるのだが、言葉が順調に通じないことは哀しいことだった。

張^{ジャン}家に行く^{いく}と私を、家族は皆客人として迎えてくれる。大久保先生と坂本さんは、搾油工場の仕事はとても重労働で耐えられないと一週間もしないで宝清にもど^{もど}ってしまい、徳田さん一人が残^{のこ}って頭張^{あたま}っていた。

張^{ジャン}家の支配人、黄^{ワウ}老人は山東省産まれ、筆の達者な人で、その漢字を覚えた漢音で読んでみると、意外に日本の音読みに通じるものがある。そんな形で中国語を少しづつ覚えては日本語におきかえていく。そんな私を黄^{ワウ}老人は目を細めて「頭がいい」と撫^{なで}でてくれる。

周田が子供はもちろん、親方までが字を読めない人が多かったから、小学校しか行かない私の覚えていない文学や数学でも、尊敬の対象になったものでしょう。

黄老人は、「中国人と日本人は兄弟なんだよ」と聞かせてくれたものだった。それは秦の始皇帝にまつわる話で、

古来、中国の東海の遠い島に自生する不老長寿の薬草を求めて、優れた男、女五百人ずつを採集するのに船で送ったという。しかしそんな薬草のあろうはずもなく、空しく帰国すると、その人たちは海辺で首を斬られてしまう。それでも必ずあるはずだという方土のすすめで、再度、よりすぐれた男、女五百人ずつを送ったのだという。その人たちは帰れば殺されること分かっているから、そのまま東海のその島に住みついたのさ、その島こそ今の日本であり、その先祖になつた中国から選ばれた優秀な血がはいっているから日本人は頭がよいのさ、だから中国は兄であり、日本は弟の国なんだと説明するのだった。

この語りは敗戦後の中国を転転とした二年半、どこ

でも親しみをこめて私は聞かされた。

それにしてもその弟が、兄の中国へ出かけて荒し回ったのである。

故国を指して

昭和二十一年六月、中共軍の支配下になつた宝清県の宮^ツさんの家から、宝清街、東安市へと歩き、東安からは汽車で、しかし牡丹江に着いた九月四日には、国府軍と停戦を結んでの日本人の引揚げ（送還）業務が終了した後で、奥地からようやくの思いでたどりついた三百人余りの人たちは、再び牡丹江の街に散らばつた中国人の世話になり冬を越さなければならなかつたのである。

解放軍に志願すれば私のような少年でも拾ってくれるのだが、それは祖国に帰ることを断念することになる。

孤児仲間は四人、街に出て裕福そうな家を探しては、水汲みや庭の掃除の手伝いをして駄賃をもらい、粟と塩、水を買って飢えをしのいでいた。

やがて私が中国語が上手だからと、解放軍の軍服を

つくる被服廠に通訳として拾われる。

ポタン穴やポタンつけ、ミシンでとどかない手仕事に日本人の女性が働いており、信頼されて四国出身の三瀬おじさんが倉庫係として鍵を預かって責任をもたされていた。

私は親子のように三瀬おじさんと二人階下の部屋で住むことになる。この方との出会いがなければ、私は日本に帰る機会が得られなかったに違いない。

工場長の城^{まぎ}さんが満州民族でやがて満州時代の特務機関員だった身分が解放軍に察知されて、私は出資者だった王^{ワン}さんに引き取られる。

王^{ワン}さんは山東生れの漢民族、満州時代に革靴の木型づくりの職人からのたきあげで財をなし、牡丹江屈指の金持ちとなつて、市内に五つものいろいろな店をもつ親方だったが、子種のない人で、二号、三号夫人も子宝に恵まれなかったから、第一夫人の上級学校を終えた甥を山東省の郷里から連れてきて養子にしておつたのだが、この青年は胸を患う病弱で、毎日血痰を吐いていた。

日本人の浮浪児の私を自分の後継者にしたらしい。私はそんな気には全然なれなかったのだが、社長の息子ということで紹介もされ、服も新調、足もお手のもの木型をつくり革靴までピツタリのをそろえてくれて店の番に立たせてくれた。うれしくなかった訳ではないが、私はどうしたらこの牡丹江から脱けて日本に帰れるか、そればかり考えて三瀬おじさんと引き離されてからも打ち合わせに街の中を走っていた。

昭和二十二年七月、三瀬おじさんが牡丹江から出る、「昭ちゃんも行くなら一緒に。お金のことは心配ないからおいで」との連絡を受けて、私は店を出た。でもあんなにかわいがってもらった王^{ワン}さんに一言のお礼も言わないで逃げる訳にはいかない。大事にされた日本人としての誇りもあった。

強情な私の日本に帰ると言う言葉は充分知っていた。泣き出した王^{ワン}さんが店にもどり、その日の売り上げの大金を私の懐にねじこみながら、頭を押さえながら「富^{フジメ}樫、お前の強情には負けた。でも今は内戦で日本には帰れないと思う。金が足りなくて帰れないのであ

れば、行く先々へ送ってあげる。金があっても帰れないければ何年後でもよい、必ずここへもどって来いよ」私も王さんの愛情に泣かされた。心の大らかな大人だったのである。

牡丹江の駅には三瀬おじさんと満州人の謝さんが待っていてくれてハルビンへ。

謝さんの案内で連れて行かれたところは、あの八か月前に牡丹江から失踪した城工場長夫妻の隠れ家のアパートだったのである。

解放軍の工作隊に気づかれそうだから引越しをする、その手伝いに謝さんが、ついでに三瀬さんと私が幸い牡丹江から連れ出してもらえたのであった。

ハルビンからは歩いて長春まで九日間。着いた長春では明後日八月十五日から日本人の移送が始まるという直前だった。そして第一番。

周囲を見回しても楊栄開拓団の生き残りの人たちはだれもいない。私一人が三瀬おじさんにすがって日本に帰ることが出来たのだった。

戦争は悲惨な無情のものである。私も両親や弟を

失って天涯の孤児となって中国の大陸を彷徨した。失うものばかりだった私にとってその間恵まれた恩義は今も忘れられない。

十月二十八日、英彦丸は時速七ノット。

遙かになった大陸の低い山並が墨絵のように見えている。静かな海だった。折から巨大な太陽が……余りにも多くの人びとの血で染ったように真っ赤になって落ちてゆく。

とめどなく流れる痛哭の涙がレンズとなって、赤い夕陽が見たことのない大きなものになって沈んでゆく。それは故国を指して幾百里の少年の旅の終章を告げるものだった。

【執筆者の横顔】

富樫昭治氏は山形県庄内の、かつて村長をしておられた農村の旧家の出である。

十一歳のとき父親と共に移り住んだソ満国境の宝清県の草原開拓地で終戦の混乱のとき十三歳だった。大事な母親や弟と死別、父親とは生別、惨憺たる放浪の

旅をつづけ単身日本に引揚げるまで、その労苦の生々しい実話は深い哀愁と驚くほどの強靱な意志で貫いてきた、「真心に国境はない」満州人と昭治少年はうるわしいほど親しみあって宝清から佳木斯、牡丹江、ハルビン、新京、奉天、コロ島、佐世保上陸へと、引揚げられたときは、昭和二十二年十月、十五歳である、よくぞ終戦以来二年三か月の間に正に故国を指して幾百里、ついに故郷にたどりついて感激の涙を流した。

昭治氏には比類ない人間性がある。少年にして既に教養と陶冶された精神が自ら身につく恩義に報いる道に生きた。

ソ連抑留一年間の生活を経て、父親は引揚げておられたので、日本再建は自ら耕すことだと決意し、父親の承諾を得て、北海道の幌延平原に牧畜開拓へと転じた。

昭和五十三年三月、昭治氏は三十二年ぶりに満州を訪問して残留している昔の開拓団家族と再会し、断腸の思いで引き裂かれた彼女たちの祖国への思慕の深さに涙を流し、五十四年三月には一家五人を北海道の幌

延の自宅に引受人として満州から迎え、生活の一切を責任もって世話している。

昭治氏のこの真実を見聞するとき、どなたも感謝しないものはいない。

(旭引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

海外引揚者の語り継ぐ労苦

岩手県 佐藤 千代治

渡満から日ソ開戦まで

海外雄飛の野望に燃えて内地の官界を捨て、満州国三江省に渡ったのは昭和十五年八月であった。三江省は満州国の東北部に位し松花江、黒龍江、烏蘇江の三大河の流域で直接ソ連に接し省都佳木斯(人口約十三万)は全満屈指の軍都として師団司令部が置かれ、国境警備体制が敷かれていた。

他面佳木斯を中心とする第一次弥栄、第二次千振の